

## モノと社会の関わり

——京都市東山区における着物に関する意識調査——

林 隆 紀

### 〔抄 録〕

この報告の目的は、モノを通じた伝統文化の継承と地域活性化への指針を見出すための基礎資料作成のために行った住民への意識調査の結果を整理することにある。このため京都市東山区において、和服への意識と地域への関わり意識を同時調査した。調査では和服の着用実態、和服へのイメージ、処理方法などについて主として選択肢による質問を行った。同時に地域への愛着度、参加実態、参加への姿勢、居住年数なども調査し、地域との関わりに対する検討も行った。その結果、和服は現代の生活様式の中では着用機会が著しく減少しており、中でも年配層（60 歳以上）における着用機会の減少が際立っていることがわかった。また地域参加について、居住年数 30 年を境に愛着度に差が出ることや、『しきたり重視派』が多数派であることがわかったが、地域行事への参加が多いのは、『住民協働派』であり、地域との関わり方が一つの因子ではくくれないことが明らかとなった。

キーワード：和服、意識調査、地域参加、京都市東山区

### 1. はじめに

日本はすでに少子高齢化に伴う本格的な人口減少社会へとかじを取りはじめ、様々な問題が表面化し始めている。2014 年度の我が国の人口は 1 億 2,708 万人、高齢化率は 26.0%と発表されている<sup>(1)</sup>。更に 2060 年には総人口は 9,000 万人を切り、高齢化率もほぼ 40%に達するとみられている。これは 2.5 人に 1 人が 65 歳以上になることを意味し、多くの地域コミュニティ基盤が存続の危機を迎えている。それに加え、日本の従来の生活様式から新しい生活様式へと変容が進んでいる我が国において、地域の活性化や雇用の創出など、生活環境の向上のために解決すべき課題は山積している。このため地域住民の生活や社会活動の基盤となる地域社会を持続可能なものとする条件<sup>(2)</sup>や仕組みについて研究することは、緊急かつ重要なテーマである

と言える。

これらの流れを踏まえて、本報告は人口減少社会における持続可能な地域モデルを構築する条件を検討するための基礎資料を整理することを目的とする。すなわち、市民の実態、ならびに意識がどのように変容しているのか、伝統文化につながる衣生活の視点からの意識調査を行い、その集計を試みた。特に和文化のブランド力が非常に高いと内外に認められている京都市東山区を調査地域にして、和服に対する意識と着用実態はどのようになっているか、またその意識と地域への関わりにつながりがないかについての調査結果を単純集計した結果をまとめて報告する。

## 2. 京都市東山区の概要

東山地区は京都市東部に位置し、東山連邦と鴨川に挟まれた細長い地区<sup>(3)</sup>を指す。京都市内中心部に近く、市内バス路線は大通りを中心に複数系統運行されており、ターミナルや繁華街へのアクセスは良好である。この地域は平安建都（794年）以前から開かれていた歴史の古い場所であり、現在も知恩院、清水寺や三十三間堂、東福寺など、京都を象徴する歴史的建造物は数多い。そのため観光スポットとしてのイメージが非常に強い一方で、JR京都駅の南側は古くからの住宅街としての顔も併せ持っている。特に東山のすそ野の住宅地では、起伏が激しく、また道幅も狭い。このため大規模な新規開拓や地区改修も行われず、高齢化率や空き家率の上昇を招いている地域でもある。平成27年の京都市統計調査によると、人口は39,054人、世帯数は21,004世帯とされている。男女比は73:100、高齢化率は32.2%であり<sup>(4)</sup>、京都市の中で最も高齢化率が高い。まさに東山区は都市部における人口減少社会モデルのひとつとみなすことができる。

## 3. 意識調査の集計

### 3.1 調査方法および属性

主な調査項目として「和服への意識と実態」「地域コミュニティへの意識と実態」「基本属性（年齢、性別、居住年数）」などを選定し、戸口配布による質問紙調査<sup>(5)</sup>を行った。対象者は京都市東山区の居住者とし、全2,395世帯<sup>(6)</sup>（開晴、一橋、今熊野、月輪4学区各600部）を選定し、自記記録、郵送による回収を行った。有効回収数は486票であった。配布日時は2014年7月30日、31日の2日間で行った。回答者の男女比は5:9で、年齢構成は表1に示したように高齢者が多い結果となった。家族構成を尋ねると、一人暮らしは全体の22.5%で、そのうち7割が高齢者であることが明らかとなった。

表1 回答者の年齢構成

年齢	割合	年齢	割合	年齢	割合
20歳未満	0.2%	40~49歳	13.5%	70~79歳	27.3%
20~29歳	3.1%	50~59歳	13.2%	80歳以上	13.3%
30~39歳	4.8%	60~69歳	24.6%		

### 3.2 和服に関する意識に関する単純集計結果

まず一般的な衣服に関する情報を入手するための手段として何が最も利用されているかについて回答を求めたところ（複数回答）、図1のように「店頭・ウィンドウディスプレイ」が70.0%と最も多く、次いで「新聞広告・チラシ」が32.9%、「ファッション雑誌」が25.3%と続いた。これは全国で実施された中小企業総合事業団「繊維製品に関する消費者行動分析調査報告書（2002年）」のデータ<sup>(7)</sup>と同様の傾向を示している。

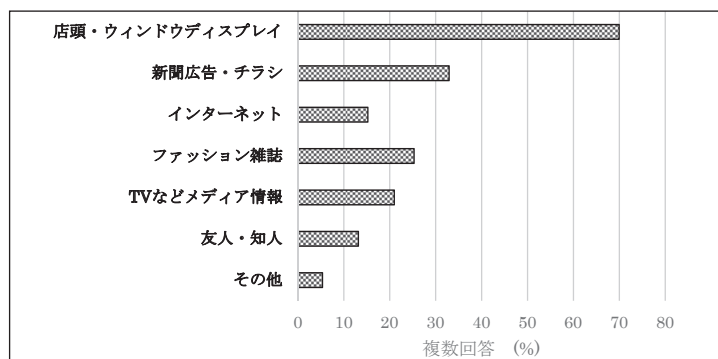


図1 衣服購入に関する情報入手手段

また衣服購入の際に重視する項目についての質問の結果を図2に示した。「デザインが自分の趣味、感覚にあっている（71.2%）」と「価格が手ごろである（68.1%）」がほぼ同数で筆頭に、次いで「品質（材料、縫製）がよい（55.3%）」までが過半数を超える項目となった。

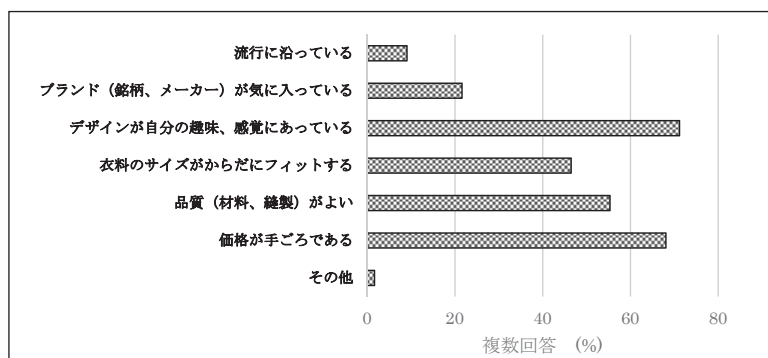


図2 衣服購入の決め手

ここでフォーマルな洋服（外出着）の購入場所としてもっとも頻繁に利用する場所を尋ねたところ、「百貨店」が58.5%と過半数を占め、2番目に多かった「専門店」と合わせると83.9%となった。この結果を図3に示す。特に60歳以上の女性は、「よそゆき」の服を「百貨店」で買う傾向が顕著であることがわかった。先述の「繊維製品アンケート（2002）」結果では服の購入先が「百貨店」「専門店」「スーパー」に均等に分散されていた結果とは大いに異なる特徴である。

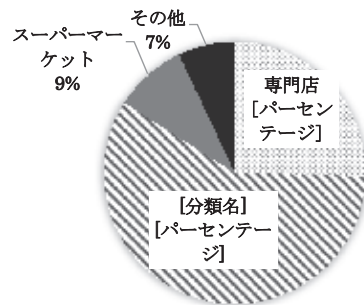


図3 主な衣服購入場所

次に一般的な質問として、ファッションに興味があるか尋ねた結果を図4-1に示した。図からは「とてもある（18.6%）」「ややある（50.8%）」と肯定的な意見が三分の二以上となった。続けて衣服を和服に限定し、同様の質問をした結果を図4-2に示す。ここでは「とてもある（10.9%）」「ややある（29.8%）」と肯定的な意見の割合は減少し、むしろ否定的な意見が過半数（59.3%）を超えた。

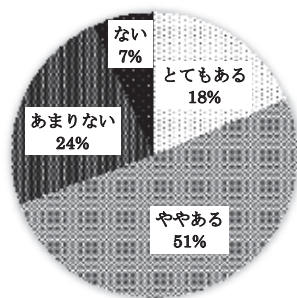


図4-1 ファッションへの興味

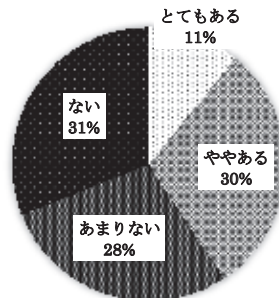


図4-2 和服への興味

さらに男女の比較をすると、前者のファッションへの興味に関して、女性の75.2%が肯定（「とてもある」「ややある」）的な意見であったのに対し、男性では肯定的な意見は53.8%にとどまり、男女間で約1.5倍の意識差があることが明らかとなった。また後者の和服への興味における肯定的意見の割合は、女性で48.7%、男性では24%と、約2倍に意識差は広がることがわかった。ここでさらに一人暮らしに限定して肯定的な意見の割合を見ると、ファッションへの興味では女性の34.2%に対して男性はわずか3%、和服への興味では女性の21.1%に対して男性は0%と、さらに意識格差が広がることがわかる。属性のデータから今回の回答者における「一人暮らし」では7割が高齢者であることが分かっており、高齢、一人暮らしの男性は衣服に対しての興味関心が著しく低いことが明らかとなった。

続いて和服を着用する頻度について調べた結果を図5に示す。全体では「ほとんど着用しない（64.7%）」が群を抜いて多く、次いで「数年に1回（14.7%）」が続き、日常生活において和

服着用の習慣は浸透していないことが明らかとなった。「1 年に 1~4 回 (12.8%)」はかろうじて一定数いるものの、「1 月に 1 回以上 (4.7%)」など日常の行事に和服を取り入れる人々は少数派であることがわかる。年に複数回着る層に限定して年齢による着用比率の違いを調べると、40 歳未満の女性と 60 才以上の女性では大きな差異 (40 歳未満が 33.3%, 60 歳以上が 16.7%) が見いだされた。40 歳未満に比べて一般に和服になじんでいるだろうとみなされている 60 歳以上の世代の着用率が予想以上に低い結果は、現代の生活様式に合致していない現状を浮き彫りにしているといえる。

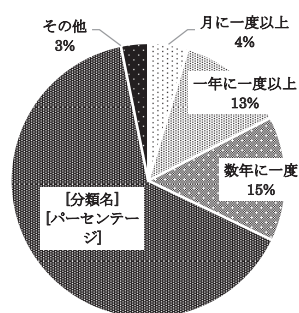


図 5 着用頻度

和服について人々が抱いている印象を、図 6 に示すように SD (Semantic Differential Method) 法を用いて検討した。特筆すべき点として、「伝統」に関する項目では 93.0% が賛同していたが、「古い」に関する項目では 25.7% しか賛同していなかったことが挙げられる。日常生活で着用する機会は少ないものの、和服は単に昔の衣類とみなされているわけではないようである。

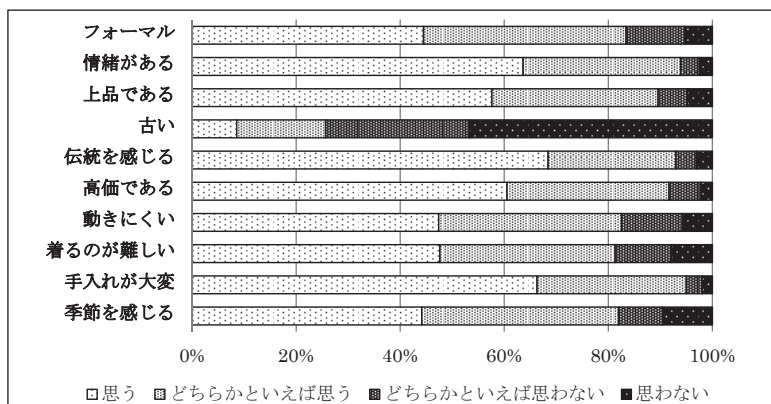


図 6 和服の印象

図 7-1, 図 7-2 に衣類の処理方法について調べた結果を示した。図 7-1 は洋服の処理方法について (複数回答可) で、「一般ごみとして廃棄している (49.1%)」が約半数で最も多く、ここに男女差は見られなかった。続いて「タンスにしまっている (37.4%)」が多く、男女別では女性が 32.3%, 男性が 42% とむしろ男性の方が高い傾向が見られた。「人に譲渡している [有料, 無料含む] (27.8%)」「資源ごみとして自治体で処理している (25.9%)」についてはいずれも女性が 10 ポイントもしくはそれ以上高く、女性が積極的に何らかの方法で処理しようとしている様子がうかがえる。

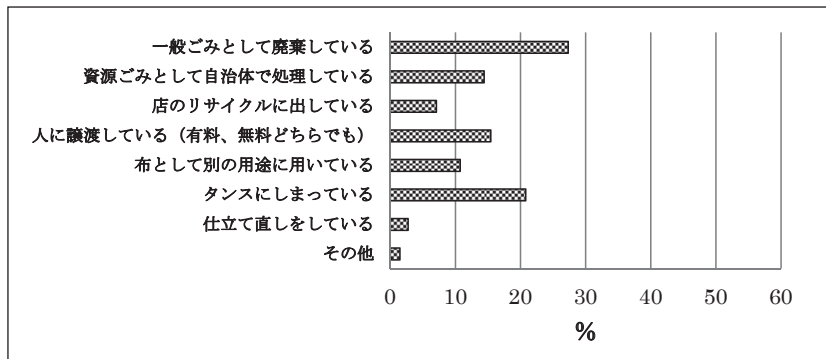


図 7-1 洋服の処理方法

これに対し、図 7-2 に示すように、和服の処理では「一般ごみとして廃棄している（8.8%）」「資源ごみとして自治体で処理している（4.7%）」がともに洋服での結果の五分の一の割合に激減し、「人に譲渡している〔有料、無料含む〕（15.0%）」も半分程度になっている。一方で「タンスにしまっている（62.1%）」は大幅に増加し、普段ほとんど着用する機会はないが、捨てられず家の奥に死蔵されている様子が明確に数字に表れている。またその比率も男女逆転し、10ポイント以上女性の方が高くなっていることもわかった。

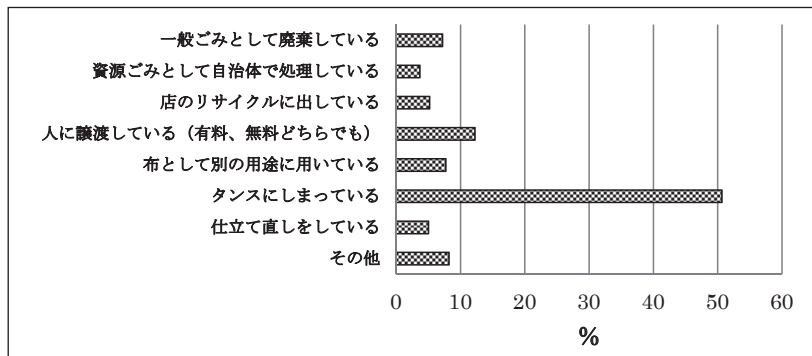


図 7-2 和服の処理方法

この結果は洋服におけるタンスへの死蔵と和服におけるタンスへの死蔵では意味が異なる可能性を示しているとも考えられ、今後詳細に検討する必要がある。すなわち和服の処理を単純なカスケードリサイクルに組み込むことに無理がある点には特に配慮する必要がある。着物の大きな特徴である『仕立て直し』については、「洋服（5.3%）」「和服（6.2%）」とほぼ変わらず少数意見であると言える。

### 3.3 和服への自由記述

「和服を着用することや和服文化について」の自由記述をまとめると、「守るべき日本文化」「伝



続の衣服だから大切に若い人たちに受け継いでほしい」などとする肯定的な意見がもっとも多くみられた。しかし一方で「めんどろ」「着るのが難しい」「手入れが大変」「時間がかかる」など、着用や保管の困難性を指摘する意見も同程度に見受けられた。加えて「高価である」ことが和服を遠ざけているという指摘も少なくなかった。さらに「着用する機会がない」「あっても冠婚葬祭のみ」など、日常生活とは乖離したところでの存在として認識されていることがわかる。

集計結果では、年配層（60歳以上）と若年層（40歳以下）では、むしろ若年層の方が高い着用率になっていることを指摘した。この点について自由記述からの意見を拾うと、「年を取ると、今更不自由な着物は着たくなく、洋服で気軽に過ごしたい」「いいと思うが自分が着る気にはなれない」「私はこんな動きにくい、煩わしい、鬱陶しい、面倒・・・など、の着衣はないと思います」「儀式のある時に着ますが、帯が結べなくなりました（高齢のため）」などがある。生活スタイルの西洋化とそれに伴う洋服の進化により、手軽さの点で和服は大きく後れを取っていると言える。

もう一点、特徴的な内容として、「観光で着て歩いてられる方を見ると何やら恥ずかしい気がする」「着崩して下品な人は情緒に欠けると感じる」「あまりに品のないむちゃくちゃな着方が多いので悲しい」「着用するならうまく着こなしてほしい。特に観光客などはなっていない。見苦しい」など、着用時の見た目などにこだわる意見があった。これは伝統的な着用ルールからの逸脱に抵抗がある人が一定数いることを示しており、洋服とは異なり、着こなしに関する気軽さやデザインなどを単純に進化させればよいとは言えない難しさを表している。

### 3.4 地域とのかかわりに関する単純集計結果

先に述べたとおり、京都市東山区は区内に知恩院、清水寺や三十三間堂などを有し、京都を代表する観光地とみなされている。「東山区は他地域と比べて和服が似合うか」という問いかけに対して、「思う（43.7%）」「どちらかといえば思う（25.1%）」「どちらともいえない（20.0%）」「どちらかといえば思わない（4.0%）」「思わない（7.2%）」という結果を得た。この結果を図8に示す。否定派がわずか1割程度という結果は、京都、特に東山地区の特徴ともいえる。一方で同じ東山区でも京都駅以南の地区は住宅地として展開されており、とりわけ区南東部は山裾に宅地が広がり、細い坂道が連なっている。このエリアは古くからの居住者が多く、その結果、東山区は市内でもっとも高齢化率が高い地域となっている。

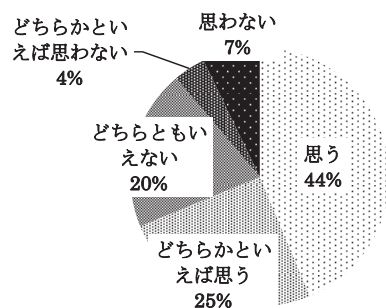


図8 地域に和服が似合うか

また地域の特徴について、SD法を用いて調べると、図9のような結果が得られた。「新旧」「和」

「利便性」の3点の評価からは、東山区が和風の古い町並みである一方で、利便性も高い町であると認識されていることがわかる。

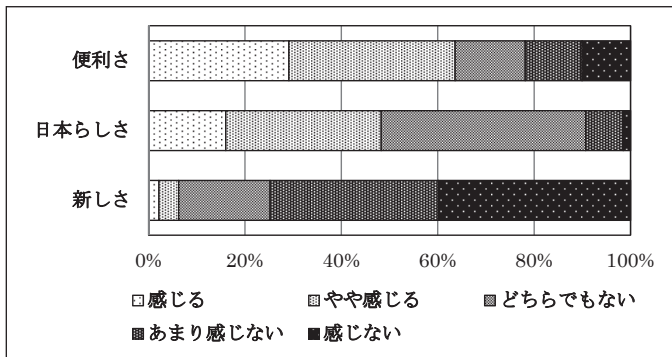


図9 地域に和服が似合うか

また地元への愛着を感じる居住年数についてクロス集計を取ると、居住年数30年を境にして、意識格差が現れることが見いだされた。これを図10に示す。

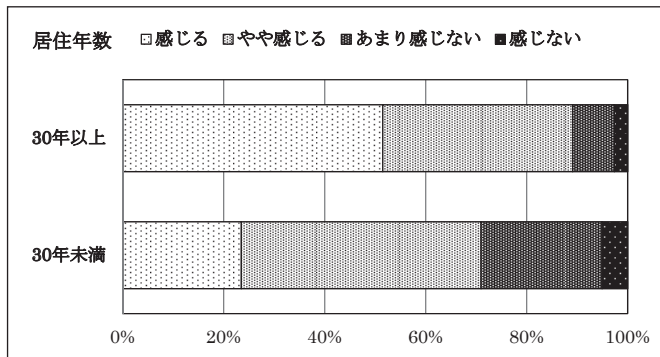


図10 地元への愛着度

次に地域行事への参加実態について調べると、参加意識を持っている人が54.7%、参加意識をあまり持っていない人が45.3%であった。さらに地域参加への姿勢について調べた結果を図11に示す。質問での表現について、選択肢1を「しきたり重視派」、選択肢2を「無関心派」、選択肢3を「市政への意見反映派」、選択肢4を「住民協働派」と名付けることにする。

続いて『参加実態』と『地域参加への姿勢』の2つをクロス集計し関連を調べた。地域行事に「いつも参加している」人の割合は、「協働派」全体の23.2%を占め、これは「しきたり重視派」全体の13.5%に対して約1.7倍となり、住民協働意識の高い人が地域活動を担う割合が高いことがわかった。同じく『居住年数』と『参加実態』について関連を検討した。居住年数30年以上の層では、地域行事に「いつも参加している」人の割合は18.8%であり、居住年数30年未満の層で地域行事に「いつも参加している」人の割合は11.0%であった。この割合に



ついても 1.7 倍の差があることがわかった。しかし『地域参加への姿勢』と『居住年数』の関連性については、30 年での区切りでは明確な違いが見いだされなかった。

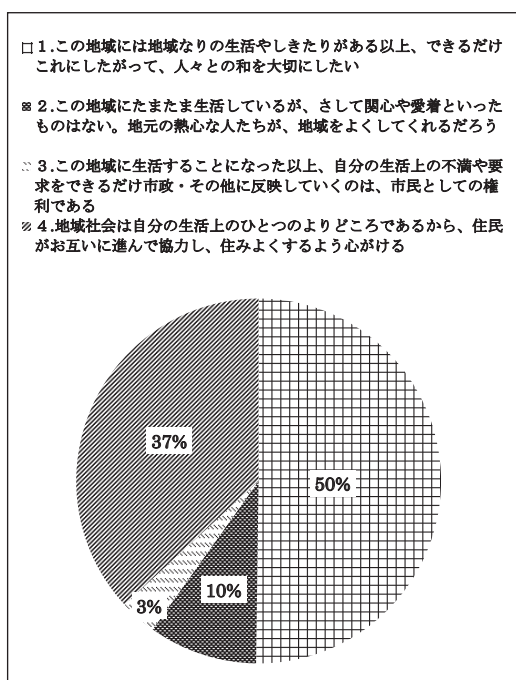


図 11 地域参加への姿勢

#### 4. おわりに代えて

京都市東山区において、和服への意識と地域への関わり意識を同時調査した結果を集計した。和服を 1 年に一度以上着用する人は全体の 2 割以下であること、また年配層（60 歳以上）よりも若年層（40 歳未満）の方が着用する機会が多いことなどが明らかとなった。着用にかかる手間やメンテナンス、煩わしさなどが着用機会を制限しているものの、今なお特別な『ハレ』の衣類として捉えられ、過去のものとみなしているわけではないことも明らかとなった。和服の処理や流通については、個人単位ではほぼなされていないこともわかった。

また地域参加について、居住年数 30 年を境に愛着度に差が出ることが分かった。またこの地域では古くからのしきたりを重視しながら和を保とうとする意識が強い人（しきたり重視派）が多いこともわかったが、地域行事への参加が多いのは、互いに協力して住みやすさを追求しようとする人（住民協働派）であることもわかった。

今後は他地域（京都市内、京都市外）にも同様の調査を行い、その結果と比較することでそれぞれの地域の特徴を明らかにし、また和服を通じた和文化の継承が地域との関わりの鍵となり得るかにについて明らかにしたい。

〔注〕

- (1) 内閣府（2015）「平成 27 年版高齢社会白書（概要版）」
- (2) 矢口克也（2010）「持続可能な発展理念の実践過程と到達点」『総合調査報告書－持続可能な社会の構築』国立国会図書館調査及び立法考査局，第 1 部第 2 章部分
- (3) 京都市東山区役所「歩いて楽しむ東山」<http://higashiyama-kanko.jp/about/index.html>
- (4) 京都市（2015）京都市統計月報（平成 27 年 8 月号）
- (5) アンケート調査・分析ができる本」岩佐英彦，宿久洋 2009 年 秀和システム
- (6) 配布数 2,400 部（4 地区各 600 部）を予定していたが，予想以上に空き家率が多く，5 部配布できなかったことにより，配布数を 2,395 部としている。
- (7) 中小企業総合事業団「繊維製品に関する消費者行動分析調査報告書」2002 年

〔付記〕

本報告は平成 26 年度佛教大学総合研究所共同研究「地域モデルプロジェクト」による成果の一部です。質問紙調査にご回答，ご郵送いただいた東山区居住の方々にお礼を申し上げます。また意識調査を共同で実施し，分析に多大な尽力をいただいた水上象吾佛教大学准教授，清水陽子関西学院大学准教授ならびにプロジェクトを総括していただいた的場信樹佛教大学教授に深く謝意を表します。

（はやし たかのり 公共政策学科）

2015 年 11 月 2 日受理